

# 春秋半年暦と倒語

柴山鳥人

日本書紀の応神天皇8年（西暦277年、丁酉）を百濟阿華王6年（西暦397年、丁酉）  
と同年の春分から秋分とした春秋半年暦の復元を起点にして大倭国の歴史は復元できる。

## 目次

4の01	ホムタ8半年と阿花6年	1
4の02	オオサザキ治世27半年	3
4の03	宋書の倭の五王との一致	4
4の04	オオハツセ4半年の改暦	6
4の05	一言主神と赤猪子の倒語	7
4の06	3年の空位の苦心の創作	9
4の07	倒語と蜻蛉の2回の交尾	10

## 4の01 ホムタ8半年と阿花6年

東征はいつ行われたのでしょうか。

東征を実行したのは大王になる前のミマキイリヒコイニエ（10代崇神）です。イニエ（10代崇神）は古事記に「大王の御年は百あまり六十あまり八歳で戊寅（つちのえとら）の年の十二月に亡くなった。」と記載されています。

崩御した戊寅の年が西暦258年であれば3世紀前半に、西暦318年であれば3世紀後半に東征が行われたと推測できます。

しかし、古事記に記載されている百あまり六十あまり八歳で亡くなったとのイニエ（10代崇神）の異常な長寿は信用できません。

魏志倭人伝に「倭人は、正しい暦の使い方を知らずに、ただ、春の耕作と秋のとり入れをもって、年を数えている」との記載があります。

1年を2年とする半年暦であったなら古事記の異常な長寿の説明がつかます。

倭人は、春の耕作と秋のとり入れをもって、年を数えていたのでしょうか。

現在の日本人にはお彼岸にお墓参りをする風習があります。同様の行事をしている仏教国は他にありません。お彼岸の中日が春分の日、秋分の日です。皇室では先祖祭りの神事が行われています。日本国は春分の日、秋分の日を祝日にしています。古来の春秋半年暦の行事が反映されているのではないのでしょうか。

太陽が真東から昇り真西に沈む日である、春分の日と秋分の日を区切りとする春秋半年暦を古代の人々が使っていた可能性があります。

「日本の歴史：1」（編者（代表）家永三郎、ほるぷ出版）を参考に検証します。

『三国史記』は、百済の阿華王の6年「夏五月、王は倭国と好を結び、太子の典支を質とした」と書いている。阿華王の6年は397年である。『日本書紀』も、（中略）「応神天皇」の8年に、「阿花王は、王子直支を天朝につかわした」と書いている。」としています。応神8年は単純に紀年を西暦に変換すると西暦277年です。

また、日本書紀に「継体天皇」の17年のところでは、「夏五月、百済王の武寧がなくなった」と書いている。「継体天皇」の17年は523年にあたる。『三国史記』は、武寧王のことを「斯摩王」と書き、523年の「夏五月、王なくなる」としている。」としています。継体17年は単純に紀年を西暦に変換すると西暦523年です。

半年暦を採用していたとすると、ホムタ（15代応神）8年以前は半年暦で、ホムタ（15代応神）8年からオオド（26代継体）17年までの間に半年暦が1年暦に変わり、オオド（26代継体）17年以降は1年暦だったと推測できます。

百済の阿華王の6年である西暦397年に対応するホムタ（15代応神）8年を西暦397年春分から秋分までの半年としてみます。

ホムタ（15代応神）41年春2月15日に大王は崩御します。春秋半年暦で41半年とすると崩御は西暦413年秋分から414年春分までの間です。

日本書紀に、同月「阿知使主らが呉から筑紫に着いた。」との記載があります。

ホムタ（15代応神）37年、春秋半年暦で西暦411年秋分から西暦412年春分に「阿知使主・都加使主を呉に遣わして、縫工女を求めさせた。高麗国に渡って呉に行こうとしたが道が分からなかった。高麗王が久礼波、久礼志の二人をつけて道案内させた。これによって行くことができた。呉の王は、縫女の四人を与えた。」との記載があります。

ホムタ（15代応神）が大陸の呉へ派遣した阿知使主らが、西暦413年秋分から41

4年春分に大陸の呉から帰ってきたこととなります。

大陸南朝の晋の歴史書、晋書に晋が減じる少し前の西暦413年に「高句麗、倭国（中略）並び方物（みつぎ物）を献ず」とあります。

日本書紀に記載されている呉は、大陸南朝の晋のことで、ホムタ（15代応神）がおくった使者阿知使主らは、西暦413年に晋に方物を献じ、西暦413年秋分から414年春分の間に帰ってきたのです。

春秋半年暦で日本書紀と晋書の記録が一致します。

## 4の02 オオサザキ治世27半年

春秋半年暦で遡る前にホムタ（15代応神）崩御以後を確認してみましょう。

崩御の翌半年の西暦414年春分から秋分を元年としてオオサザキ（16代仁徳）の治世が始まり、日本書紀によるオオサザキ（16代仁徳）の治世87年を87半年とすると西暦457年の春分から秋分の間に崩御したことになります。

古事記ではオオサザキ（16代仁徳）が崩御したのは丁卯（ひのとう）の年、西暦427年の8月です。崩御が西暦427年の春分から秋分の間だとすると、治世は27半年になります。

オオサザキ（16代仁徳）の治世は日本書紀と古事記とで矛盾があります。どちらかが半年暦の60半年、1年暦で30年誤っていることとなります。

古事記の記載が正しい場合、

ホムタ（15代応神）の治世は41半年で崩御は西暦413年秋分から414年春分、

オオサザキ（16代仁徳）の治世は27半年で崩御は西暦427年の春分から秋分、

イザホワケ（17代履中）の治世は6半年で崩御は西暦430年春分から秋分、

ミツハワケ（18代反正）の治世は5半年で崩御は西暦432年秋分から433年春分、

オアサヅマワケゴノスクネ（19代允恭）の治世は42半年で崩御は西暦453年秋分から454年春分になります。

ワケゴノスクネ（19代允恭）の崩御を甲午（きのえうま）の年、西暦454年の正月の10日あまり5日とする古事記の記載と一致します。

オオサザキ（16代仁徳）の崩御は古事記の丁卯（ひのとう）の年との記載が正しく、

治世は27半年であり日本書紀の87年は誤りでしょう。なぜ誤ってしまったのかとの疑問が生じますが、錯誤の理由の詮索は一旦保留します。

古事記では、イザホワケ（17代履中）崩御を壬申（みずのえさる）の年、西暦432年の正月と記載しています。ミツハワケ（18代反正）の崩御の年との錯誤です。

ミツハワケ（18代反正）崩御を丁丑（ひのとうし）の年、西暦437年の7月と記載しています。イザホワケ（17代履中）の崩御を壬申の年の西暦432年と誤り、そこからミツハワケ（18代反正）治世5年を半年暦ではなく1年暦の5年とし西暦437年の丁丑の年とした錯誤です。

古事記の崩御干支は正確ではないが参考にはなると考えます。

なお、オオサザキ（16代仁徳）の治世は27半年ですが、日本書紀にオオサザキ（16代仁徳）58年冬10月「呉国・高麗の国が朝貢した。」との記載があります。治世58半年は西暦442年秋分から443年春分です。

宋書に西暦443年「倭国王済が、使をおくって奉獻した。そこで、安東將軍倭国王とした」と記載されています。日本書紀の記載は「宋国へ高麗を通り朝貢した。」から誤ったと考えると宋書と日本書紀の記録が一致することになります。

そうすると単純に27半年を87年に水増ししたのではないのかもしれませんが。課題として一旦保留しましょう。

#### 4の03 宋書の倭の五王との一致

大陸では晋が滅び、宋ができます。

歴史書、宋書の倭国伝には、西暦421年、宋の第一代武帝が詔して「倭の讚は、万里をへて貢をおさめた、その誠をほめ、除授（位を授ける）をあたえよ」と命じたとし、ついで、第三代の文帝の西暦425年、「讚はまた司馬曹達をおくって、表をたてまつり（敬意を表し）、方物を献じた」と記載されています。

西暦421年はオオサザキ（16代仁徳）15半年頃、西暦425年はオオサザキ（16代仁徳）23半年頃にあたりますが、日本書紀に合致する記載はありません。

オオサザキ（16代仁徳）の治世27半年は87年に水増しされているので、西暦425年にあたるオオサザキ（16代仁徳）23半年に「朝貢した」との記載があつて、後か

ら58年に水増しされて、「呉国・高麗の国が」が加えられた可能性はあります。

宋書の文帝記に「倭国王が方物を献じた」とある西暦430年はイザホワケ（17代履中）6半年頃にあたります。

日本書紀のイザホワケ6半年の西暦430年春分から秋分に、後宮に入れた姫が、兄の鷲住王がひとりで八尋屋（高く大きい家）を飛び越えていってしまい何日も経ったのに会って語るができないと嘆いています。

鷲住王はイザホワケ（17代履中）の命を受け宋に行った使者ではないでしょうか。

宋書に年代がなく「讃が死んで、弟の珍が王に立った。使をおくって貢献した」との記載があります。

ミツハワケ（18代反正）がその治世の西暦430年秋分から西暦433年春分の間に行った貢献だったのではないのでしょうか。

「讃」のホムタ（15代応神）の子であるオオサザキ（16代仁徳）は既に崩御しており、その息子で西暦430年に方物を献じたイザホワケ（17代履中）も崩御し、その弟の「珍」のミツハワケ（18代反正）が貢献したとの話が誤って伝わったのです。

宋書の文帝記に西暦438年、「珍を安東將軍倭国王とした」と記載があります。

「珍」はミツハワケ（18代反正）のはずです。西暦438年はワクゴノスクネ（19代允恭）11半年頃に該当し、日本書紀に関連する記載はありません。

宋国は珍であるミツハワケ（18代反正）の使者も、ワクゴノスクネ（19代允恭）の使者も来ていないにもかかわらず、自国の権威付けのために勝手に任命しているのです。

遡って王朝樹立後の宋が西暦421年に「讃」に位を授けたのも、後に宋にかわっておこった斉が西暦479年に「武」を安東大將軍から鎮東大將軍にしたのも、梁が西暦502年に「武」の号を征東將軍としたのも同様でしょう。

宋書には西暦443年「倭国王済が、使をおくって奉献した。そこで、安東將軍倭国王とした」とあります。

ワクゴノスクネ（19代允恭）21半年頃に該当し、日本書紀に記載はありません。オオサザキ（16代仁徳）58半年となぜ一致するのかとの理由の詮索は保留します。

次に、宋書に西暦451年、済は「使持節都督、倭・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓の六国の諸軍事」を与えられ、「安東將軍」はもとのままにしてもらいます。

ワクゴノスクネ（19代允恭）37半年頃になりますが日本書紀に記載はありません。

アナホ（20代安康）の治世は3半年で崩御は西暦455年春分から秋分です。

宋書には年代がなく、「済が死に、世子の興が使をおくって貢献した」とあります。

アナホ（20代安康）がその治世の西暦454年春分からか455年秋分の間に行った貢献だったのではないのでしょうか。宋が混乱していた時期のため年代の記載がないのです。

#### 4の04 オオハツセ4半年の改暦

オオハツセノワカタケ（21代雄略）の治世は23半年です。

宋書の西暦460年「倭国が使をおくって貢献した」のは、

『治世8年（春秋半年暦で西暦459年春分から秋分）春2月、身狭村主青・桧隅民使博徳を呉国に遣わされた。

治世10年（西暦460年春分から秋分）秋9月、身狭村主青等が、呉の献った二羽の鷺鳥をもって、筑紫に行った。』と記載され、

宋書の西暦462年、孝武帝は詔して、「倭王の世子である興は、（中略）うやうやしく貢物をおさめてきた。興はあたらしく辺土のまもりを嗣いだので、爵号を授けて安東將軍倭国王とせよ」といった、と書かれているのは、

『治世12年（春秋半年暦で西暦461年春分から秋分）夏4月、身狭村主青と桧隅民使博徳とを、呉に遣わされた。

治世14年（西暦462年春分から秋分）春1月、身狭村主青らは、呉国の使いと共に住江の津に泊った。3月、臣連に命じて、呉の使いを迎えさせた。』と日本書紀に記載されています。

宋へ短期間に二度の使者をおくったのは、「興」であるアナホ（20代安康）の弟の「武」のオオハツセ（21代雄略）です。宋は「興」だと誤解しているのです。

また、古事記にもオオハツセワカタケルの『御世に呉人が海を渡り来た』とあります。西暦462年には宋国の使者が来日したのでしょうか。

宋書の西暦460年と西暦462年の記載と、日本書紀のオオハツセ（21代雄略）の8年、10年と12年、14年とは春秋半年暦で一致します。

しかし、日本書紀にはオオハツセ（21代雄略）「6年夏4月、呉国が使いを遣わして貢物を奉った。」との記載もありますが、宋書には半年暦のオオハツセ（21代雄略）6半年である西暦458年の記録は無く、一致しません。

「夏4月、呉国が使いを遣わして貢物を奉った」のは、宋国の使者が来日した西暦462年の春1月、「身狭村主青らは、呉国の使いと共に住江の津に泊った。3月、臣連に命じて、呉の使いを迎えさせた」の続きではないでしょうか。

半年暦と一年暦とが混在して記載されていて、西暦462年の1月と3月が春秋半年暦の14半年で、同年の4月が1年暦の6年として記載されているのです。

オオハツセ（21代雄略）6年が西暦462年で1年暦だとすると元年は西暦457年になります。オオハツセ（21代雄略）元年は単純に紀年を西暦に変換すると西暦457年です。

西暦457年は半年暦でオオハツセ（21代雄略）4半年（西暦457年春分から秋分）です。半年暦オオハツセ（21代雄略）4半年に、オオハツセ（21代雄略）元年として1年暦に改正したとすると辻褄が合います。

古事記にオホハツセ（21代雄略）と一言主（ヒトコトヌシ）の大神の話があります。『大君が葛城山に登ったとき、登っている尾根の向かい側の尾根を、何から何まで大君の様と同じ山に登っている人がいます。大君がその人に問うと答えが返ってきます。「悪しきことも一言、善きことも一言、何事も一言で言い放つ神、葛城の一言主の大神である。」

大君はそれを聞くと恐れかしこんで拝み奉ります。すると大神は喜び、その奉り物を受け取ります。』

この話は、オホハツセ（21代雄略）が半年暦を一年暦に替えた話ではないでしょうか。

#### 4の05 一言主神と赤猪子の倒語

日本書紀にも一言主神（ひとことぬしのかみ）の話があります。『オオハツセ（21代雄略）4年春2月、葛城山に狩に行きます。突然人が出現します。

顔や姿がよく似ています。聞くと

「現人神で、一言主神（ひとことぬしのかみ）である。」と言います。

一緒に狩をたのしみます。狩も終わり、神は天皇を見送りされて、来目川までお越しになります。』

一言主神の話は、オオハツセ（21代雄略）が春秋半年暦のオオハツセ（21代雄略）4年春2月に暦を一年暦に替えた話なのです。

オオハツセ（21代雄略）の治世の話には、一言主の大神のように意味が分らない話はいくつかあります。

古事記にある引田部赤猪子の話もその一つです。『大君に声をかけられた引田部のアカキの子が、嫁がずに待っていると年を取り老い果ててしまった』とあります。

記録係に任命されていた引田部のアカキの子が、春秋半年暦で1年を2半年として記録していて、一年暦に替えたのを知らされずにいて嘆いたとの話ではないでしょうか。

日本書紀にある浦島子の話も不思議な話です。オオハツセ（21代雄略）22年秋7月、「丹波国与謝郡の筒川の人、水江浦島子が、舟に乗って釣りをしていた。そして大亀を得た。それがたちまち女となった。浦島は感動して妻とした。二人は一緒に海中に入り、蓬莱山に至って、仙境を見て回った。」との記載があります。

オオハツセ（21代雄略）22年は西暦457年を元年とした一年暦では西暦478年です。

宋書によると西暦478年、倭王武は順帝に使をおくって表をさしだしています。浦島子はオオハツセ（21代雄略）が宋におくった使者だったのではないのでしょうか。

浦島太郎の昔話は、竜宮城から帰ってきて玉手箱を開けると年をとってしまいます。宋から帰ってきたときにはオオハツセ（21代雄略）は崩御していて、政権も変わってしまっていたことを示しているのではないのでしょうか。

オオハツセ（21代雄略）は一年暦の治世23年、西暦479年に崩御します。しかし、古事記では大王オホハツセ（21代雄略）の崩御を己巳（つちのとみ）の年の西暦489年としていて一致しません。なぜなのかは課題として一旦保留します。

この一言主神、引田部赤猪子、浦島太郎の話はわざと話を分らないようにしているか



のようです。

日本書紀の神武天皇元年に次の記載があります。

『初めて天皇が国政をはじめられる日に、大伴氏の先祖の道臣命が、大来目部を率いて密命を受け、よく諷歌（他のことになぞらえてさとす歌）、倒語（相手に分からせず味方だけに通じるよう定めていう言葉）をもってわざわざ払いのけた。倒語の用いられるのはここに始まった。』

一言主神、引田部赤猪子、浦島太郎の話は、相手に分からせず味方にだけ通じるよう定めていう言葉、倒語なのです。

神武天皇元年の倒語の始まりの話に『大伴氏の先祖の道臣命が、大来目部を率いて密命を受け、（中略）』とあり、オオハツセ（21代雄略）の一言主神の話に『神は天皇を見送りされて、来目川までお越しになります。』とあります。

一言主神の話のなかに、来目が入っているのは、この話が倒語であることを後世の人が分かるよう示唆する赤猪子の工夫だったのです。

#### 4の06 3年の空位の苦心の創作

アナホ（20代安康）が治世3半年で西暦455年春分から秋分に崩御した後、オオハツセ（21代雄略）が治世4半年に半年暦を一年暦に替えて改めて元年とし、オオハツセ（21代雄略）の治世は3半年と23年で崩御は西暦479年、シラカノタケヒロクニオシワカヤマトネコ（22代清寧）は治世5年で崩御は西暦484年、

ヲケ（23代顕宗）は治世3年で崩御は西暦487年です。

ヲケ（23代顕宗）の治世は日本書紀では3年ですが古事記では8年です。ヲケ（23代顕宗）は父を殺したオオハツセ（21代雄略）を怨んでいました。オオハツセ（21代雄略）が改めた一年暦を再び半年暦に戻した可能性があります。シラカ（22代清寧）の崩御より後を一旦保留します。

これで西暦397年春分から秋分の応神8半年から西暦484年の清寧5年までの間の半年暦と一年暦の大王の治世の仮説ができました。

この仮説で合理的に説明できないことが三つあります。

一つ目は、オオサザキ（16代仁徳）の治世は27半年なのに、日本書紀では87年と  
していることの不一致です。

二つ目は、宋書にある西暦443年の倭国王済であるワクゴノスクネ（19代允恭）の  
奉獻と、治世が27半年のはずのオオサザキ（16代仁徳）の58半年との一致です。

三つ目は、オオハツセ（21代雄略）の崩御は一年暦の治世23年で西暦479年なの  
に、古事記では己巳（つちのとみ）の年の西暦489年としている不一致です。

この大王の治世の暦には日本書紀にはある、3年の空位がありません。

日本書紀の編集者は確実に考えた干支を基準とし、その干支に合わせるために空位を設け  
たと考えます。

3年の相違をどこかで大王の治世を改竄し3年延ばすのではなく空位を設けたことから、  
日本書紀の編集者たちには誠実な姿勢もあったと想像します。

日本書紀の編集者が確実に考え基準とした干支は、参考とした「日本の歴史：1」（編者  
（代表）家永三郎、ほるぷ出版）が指摘している、三国史記の百済の阿華王の6年と日本  
書紀の応神天皇8年の、西暦397年の干支である丁酉（ひのととり）の年だと考えます。

日本書紀の編集者は、魏志倭人伝の卑弥呼が神功皇后だと誤った判断をしています。

ホムタ（15代応神）8年の丁酉の年は本来の西暦397年ではなく西暦277年で、  
ホムタ（15代応神）元年は西暦270年、卑弥呼・神功皇后の逝去は西暦269年と誤  
認してしまったのです。

オオサザキ（16代仁徳）の治世を27年とした記録があったはずであり、空位を除い  
て1年暦で遡るとホムタ（15代応神）元年は西暦333年です。

ホムタ（15代応神）元年の西暦270年と西暦333年との差は63年です。オオサ  
ザキ（16代仁徳）の治世を27年から干支一運60年増やして87年とし、空位の3年  
を創作して加え調整したのかもしれませんが。

#### 4の07 倒語と蜻蛉の2回の交尾

国生み神話から古事記には史実を反映した物語が素にあったと考えたのと同様に、一言  
主神の話がオオハツセ（21代雄略）4年春2月に春秋半年暦を一年暦に替えた改暦の倒  
語であったことから、日本書紀も史実の記録を素に編集されていると考えます。

日本書紀の編集者は古代の人が半年暦を使っていたことを知らなかったようです。倒語

の存在を認識していなかったのではないのでしょうか。どのような意味なのかは伝えられてこなかったため、意味が分らなかったのです。

オオハツセ（21代雄略）の一言主神、引田部赤猪子、浦島太郎だけでなく、イザホワケ6半年の西暦430年春分から秋分の鷲住王の話も宋への使者を示す倒語です。

日本書紀にある不思議な話は倒語であり、本来の意味を解明することにより史実の記録が蘇生され、大倭国の実態が明らかになるのではないのでしょうか。

アナホ（20代安康）が殺害される話は比較的分かりやすい倒語です。

『大王アナホ（20代安康）は、オホクサカを殺しその妻ナガタノオホイラツメを大后にします。

大后には先の夫のオホクサカとの間に産まれた7歳の子のマヨワがいます。

その子が床下にいるときに、大王は大后に「マヨワが大きくなった時に、父親を殺したのがわれだと知ったならば、おそらく邪な心を抱くにちがいないと、そればかりを思うことよ」と語り寝てしまいます。

それを聞いたマヨワは寝ている大王を殺してしまいます。』

アナホ（20代安康）はだれに殺害されたのでしょうか。

マヨワは7歳です。半年暦の7歳でしょう。大王を殺すことは不可能です。

そもそも犯人はマヨワとの記載がなかったとしたら、犯人は明白です。

大王を殺害したのは大王にわが子が殺されてしまうのを懼れた母、大后でしょう。

大王が大后に殺害されるとの衝撃的な出来事をそのまま語るのははばかられたため、犯人をマヨワとし、これが倒語だと分かるように7歳の子だとの示唆を残したのでしょう。

倒語にして語らなければ話すこと自体が禁じられ後世に伝わらなかったかもしれません。

イクメイリヒコイサチ（11代垂仁）のサホビメとサホビコの話は、イサチ（11代垂仁）の母ミマツヒメと兄トヨキイリヒコの話が置き換わっているのではないかと疑っています。

サホビメとサホビコの話のある日本書紀のイサチ（11代垂仁）5年に「天皇は来目にお越しになり、高宮におられた。」と記載されています。

一言主神の話と同じように、来目が入っているのはサホビメとサホビコの話が倒語であることの暗号ではないのでしょうか。

意味が不明な話に、蜻蛉（あきつ）の交尾（となめ）があります。

日本書紀に神武31年、天皇が丘に登られ「なんと素晴らしい国を得たことだ。狭い国ではあるけれども、蜻蛉（あきつ）がトネメして（交尾して）いるように、山々が連なり囲んでいる国だなあ」とあります。

これはなんらかの倒語のはずです。

蜻蛉は交尾の際、まずオスが尾の先の生殖器官でメスの首をつかみ、次にメスは尾の先の生殖器官をオスの胸にあてて精子を受け取ります。

東征の実施者を大王イニエ（10代崇神）ではなくカムヤマトイワレビコ（初代神武）として話を分かりにくくしたことを味方に示唆しているのではないのでしょうか。

ニニギからの三代と、カムヤマトイハレビコからの三代も重複させています。

蜻蛉の交尾を二回させていることを連なっていると表現したのです。

これは錯誤ではなく道臣命が意図して倒語にしているのです。

#### 【参考とした書籍等】

口語訳古事記神代篇	（訳・注釈：三浦佑之	文春文庫）
口語訳古事記人世篇	（訳・注釈：三浦佑之	文春文庫）
日本書紀（上）全現代語訳	（訳：宇治谷孟	講談社学術文庫）
日本書紀（下）全現代語訳	（訳：宇治谷孟	講談社学術文庫）
先代旧事本紀 [現代語訳]	（監修：安本美典、訳：志村裕子	批評社）
日本の歴史：1	（編者（代表）：家永三郎	ほるぷ出版）
弥生時代の歴史	（著者：藤尾慎一郎	講談社現代新書）
ウィキペディア		

#### 【著者の出版物】

## アマテラスひとイツキヨミことスサノオウ

国生み神話の復元を起点に古事記と日本書紀から復元した大倭国の始まり

著者 柴山 鳥人

アマゾン電子書籍 kindle 版 397 円 (kindleunlimited 対象)

オンデマンド（ペーパーバック）1,234 円